

しんぎょう

浄土真宗本願寺派（西本願寺） 真楽寺報

令和四年九月

多生曠劫この世まで

あはれみかぶれるこの身なり
一心帰命たえずして
奉讃ひまなくこのむべし
（親鸞聖人『正像末和讃』）

親鸞聖人が、聖徳太子のご功績をたたえられる一連の皇太子聖徳奉讃の第十首目です。

聖徳太子は日本に現れて下さった釈尊であり、仏教の心を説いて弥陀の本願をお勧め下さった方として讃嘆してこられた親鸞聖人は、その慈悲のほらききが、多生曠劫よりずっとこの身に注ぎ続けられたと仰います。遙かな無限の昔から、生まれては死に生まれては死に、流転し続けてきた私に、聖徳太子が阿弥陀如来の化身として現れて御教化を下さったおかげで、如来のはたらきに出遇えませんでしたと喜ばれています。そして、必ず浄土に生まれさせ、さとりを得させると、はたらき通しの阿弥陀如来に帰命し、この恩徳を讃え続ける事をお勧めになる

のです。

ところで、私には過去に生死を繰り返してきたという自覚がありません。そもそも、たった今したこと、話したこと、考えたことをさっさと忘れている私に、この姿に生まれてくる前に、どんなのちを生きてきたのか、そんな前生のことを知る力がある筈がありません。ただ、今の私が抱えている様々な問題（例えば数え切れない煩惱とか）の原因を考えていく時に、この頭で思い当たることだけでなく、その因縁はさういふんから複雑に絡み合っているように思います。おそらく私の欲や怒りや愚痴は、近頃出来上がったものではないのでしょうか。そんな私のいのちの事情の全てを知り尽くし、常に寄り添い、真実に導き続けて下さるお慈悲のはたらきを受けていることを、「哀れみを蒙り続けている身」と述べておられるのです。

歌手でノーベル文学賞を受賞したボブ・ディランが、『Make you feel my love』という曲の中で歌っていました。冷たい世間の雨風にさらされ、悔いや憂いの荒波に翻弄されながら苦悩する人に、「温かく包み込んであげよう。あなたに会った時から、あなたのことはずっとわかってるよ。あなたのためならどんなことでもする。メイク・ユー・フィール・マイ・ラブ、（私の愛を感じられるように）」と、誓いを歌うのです。何かしら、阿弥陀如来が「あなたに、まことの心を響かせ、信心を喜ぶ者に変え成して浄土に迎え取る」と誓われた本願を連想するのは私だけでしょうか。

一六二二年の『風に吹かれて』という歌が大ヒットして日本のフォークソングにも影響を与えたボブ・ディランは、その後も多くの曲を世に出してきました。音楽に興味がない人でも、一度は聞いたことのある名前ではないかと思えます。歌手として初めてノーベル文学賞を受賞するほど大きな評価を得ている人です。しかし、その反面、その言動に対して批判をする人も沢山いたようです。有名になるほどに、詩人は孤独を感じていたのではないかと思えます。「あなたの悲しみを誰ひとり理解出来なくても、私はずっと寄り添い続ける。飢えようが、あざだらけになろうが、どんな無様な姿をさらけ出そうが、あなたのために出来ないことは何一つとしない。」という詩は、もしかしたらボブ・ディランはそんな友人にであいささえられていたのかも知れません。このような想像も「勝手に思っただけ」と言われそうですが。

この歌は、ビリー・ジョエル、ニール・ダイヤモンド、エド・シーラン、ピンク、アデル、等々、沢山の歌手が歌っています（一説には四五〇人以上だとか）。無私の愛が人に伝われば、伝わった人がそれを伝える人に変わるといふことでしょうか。

一切の生きとし生けるものを必ず救うという阿弥陀如来の平等の慈悲を聞き得た人は、そのはたらきをいのちに響かせる「南無阿弥陀仏」を称える奉讃の姿で、如来の智慧を伝えて下さっています。

一心帰命のお念仏は、その奉讃の歴史がこの身に現れているという事でもあるのでしよう。